

---

# セゾン・コロレー

雨上霞月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セゾン・コロレー

### 【Nコード】

N7451I

### 【作者名】

兩上霞月

### 【あらすじ】

「巡る季節が彩り溢れているように」  
そんな意味のこもった季彩子という名前の少女に、奏太は病院で出会う。あった瞬間に、いきなり彼氏になってくれといわれるのだが……。ほのぼのとした日常をつづる一話読みきりシリーズ。

## ？病院にて初対面の季節

永野季彩子と出会ったのは、奏太が交通事故で骨折して入院した友人の見舞いで病院に行った時だった。

はじめ、奏太は季彩子を年下だと思った。中学生に見えるような幼い容姿をしていたのだ。セミロングの真っすぐな髪をなびかせて、病院の入り口近くの自動販売機からコーヒーの缶を取り出した奏太の前に、美少女が歩いて来た。奏太はしゃがんだまま相手を見上げていた。少女はにっこりと笑って言った。

「私はキサコ。あんたは？」

「……カナタ」

奏太はそう答え、立ち上がった。

「何か御用ですか」

「ええ、御用なのよ」

季彩子は嬉しそうだった。

「私ね、不治の病なの」

突然そう告白した。

「人生、老い先短い訳よ。だからせめて思いっきり楽しみたいのね。そういうわけで、カナタくんだったかしら」

不治の病というのが冗談にしか聞こえないくらい、生き生きとした少女の表情を見つめながら、奏太は爆弾発言を聞いた。

「私の彼氏になってくれない？」

「キサコ？ ……ああ、あの子か」

入院三日で知樹は既に噂を聞いているらしい。ナガノキサコという名前を挙げるとすぐに反応した。

「何で入院してんのか不思議だよな。いつも院内を走りまわっているの」

「へえ……じゃあ不治の病ってやっぱり嘘か」

「さあね。何、日暮、お前あの子と話したの？」

「まあな。告られた」

「は！？」

「期待どおりの反応だな」

「待て、お前ら、前にどこかであったことあんの？」

「さあ。俺の記憶じゃ初対面」

知樹は意味が分からない、という顔をした。

「まあとりあえずあんまり関わらないほうがいいんじゃないか？」

「いや、そういうわけには。OKしちゃったし」

「はあ！？」

「あ、これは予想外の反応」

「こつちこそ予想しろよ！」

知樹のツツコミに奏太はくすつと笑った。

「別にいいんじゃないの。あつちだって俺の事が好きで付き合いた  
いって思ったわけじゃないからさ」

「そうなのか！？」

「うん」

奏太は季彩子の言葉を思い出しながら言った。

「恋人契約、だとさ」

「いきなり言われてOKする人は相当珍しいと思いますが」

彼氏になってくれない、と季彩子に言われたとき、奏太はこう返した。いや無理です、と直球に言うことも出来たが、なんだかその理由を逐一説明してあげないと、この少女は理解してくれなさそうに思えたのだ。

「キミはその珍しい方だつてのに賭けた」

季彩子はそう言って奏太を真正面から人差し指で指差した。

「別にいいでしょ？ キミ彼女いるの？」

「いませんけど」

「じゃあ契約成立」

「……契約？」

「そ。恋人契約。……ああ、最初に断るの忘れてたわね。私別にあったの事が好きってわけじゃないから」

「……そこは一番大事なところですよ。最初に断ってください」

季彩子はえへ、と舌を出した。

「病院にいると出会いってないのよね。同い年ぐらいの子がいてもどいつもこいつもイモばかりなわけ。その点、カナタくんは私の合格ラインに入ってたから、色々経験する相手としては申し分ないのよ」

顔で選ばれたらしい、と奏太は気付いた。

「私じゃ不満？ これでも、顔は悪くないと思うんだけど？」

媚を売るように、キサコは小首を傾げ、上目遣いで奏太を見上げて、ちよつとはにかむように微笑んだ。正直めちやくちやくに可愛い表情だった。自分の容姿のレベルはよく知っているらしい。

「契約って言いましたね」

「そうよ。正直気持ちは特に求めてないわ。でも、行動は欲しいわね。恋人らしい行動とか。私経験が欲しいから」

「……それだけ？」

「それだけ。どう？」

その頃までには、不思議と奏太の心の中に、キサコと名乗る少女への不信任はなくなっていた。いきなり恋人契約を持ちかけてきたことに対して引いていた気持ちも。

「分かった。いいよ」

言っとキサコはちよつと目を瞬いた。

「今日中に落せるとは思わなかったわ。やった！ じゃあ今からカナタくんが私の彼氏ね」

嬉しそうにぱちんと両手を合わせて言う。キサコはにこにこ笑いながら奏太の顔を覗き込んだ。

「苗字は？ カナタ、ってどう書くの？ 彼に方角の方？」

「いや。奏でるっていう字に太郎の太。苗字はヒグレ。そのまんま日が暮れるって字です」

「へえ。そうたってよく読み間違われぬ？」

「いつもですね」

「やっぱり。ああ、ねえ敬語なんてやめてよ、彼氏彼女なんだから」

「……会ったばかりだとなかなか慣れなくて。キサコ、ってというのはどう書くの？」

「季節に彩りの子で季彩子。永野季彩子よ」

季彩子は後ろ手に手を組んで言った。

「私にとって一つ一つの季節は、人生の中で大きな割合を占めるものだから。ひとつひとつに彩り豊かであってほしいってという意味なんだって」

「良い名前だね」

お世辞でなくそう思ったからそう言ったら、奏太は季彩子に睨まれた。

「そう思う？ 死ぬの前提って感じの名前じゃない？」

「……勘ぐり過ぎじゃないかな。というか、本当に不治の病なの？ すると季彩子は少し驚いたように目を瞬いて、じつと奏太を見つめた。返事をしないことに奏太が首を傾げていると、彼女はふうんと呟いて少し笑った。

「じゃあそれ、秘密にしとく」

「……は？」

「ちよつとはミステリアスな方が、女は魅力的なんですよ？」

笑って季彩子はきびすを返した。

「私の病室は303号室。学校帰りに寄って行ってね。彼女のお見舞いに来るのは当然でしょ？」

「……まあ、別にいいけど」

その言い草が気に入らなかつたのだらう、季彩子はくるりと振り返ると、脅すように言った。

「と・う・ぜ・ん・で・しょ？」

「……喜んで訪ねさせていただきます」

「よろしい」

奏太の彼女はとびきりの笑顔で言った。

「待ってるからね、日暮奏太くん」

「……っていう顛末だ」

説明が終わると知樹はじっとりとした目で奏太を睨んだ。

「お前な……永野さんが本当に不治の病だったらどうする気なんだよ」

「治らないからと言って、すぐに死ぬ病気だつて決まったわけでもないだろ」

「そりゃそうだけどさ」

わしゃわしゃと知樹は髪を掻いた。

「前からだけど、俺、お前の感性がわかんねえ」

「うん。俺も自分でも良くわかんない」

「お前な」

知樹は溜息をついた。

「……しかし日暮って面食いだつたんだな」

「別に好きでOKしたわけじゃないんだけど」

「それが一番タチの悪い部分だつ」

「向ここの要求を呑んだだけだぞ、俺は」

「それも問題だ」

奏太は肩をすくめた。

「嫌いつてわけでもないしさ。……あの子となら、デートとかキスとかしてもいいかなって思ったのは確かだし」

「気が早えよ」

「彼女が出来たらそういうのを考えるもんじゃないか？」

「や、まあそうだけど……」

知樹はもごもごと言った。

「永野季彩子ねえ……」

「悪い噂でもあるのか？」

「悪い噂ってわけじゃないけどさ。噂は多いな」

知樹は足を吊った状態のまま、奏太に言い聞かせるように腕を組んで奏太を見た。正直あまり威厳はない。

「まあ、せいぜい頑張れよ、日暮。お前がどうこの件に始末つけるのか見届けてやる」

「別れるのが前提なのかよ」

奏太は知樹のギブスを叩いてやった。

帰り際に、奏太は季彩子の病室の場所を確認しに行った。入るのはやめておいた。彼女はこれからは、と言ってはいたが、今日来いとは言っていない。病室の入り口にかかった名札の上の永野季彩子という文字を確認して帰ろうとしたら、看護婦の一人に声をかけられた。

「季彩子ちゃんのお友達？」

若い看護婦だったが、見るからにきつそうな人だ。奏太は軽く頷いた。

「へえ。あの子学校に友達いたんだ。入らないの？」

「どうせまた明日も来るんで」

「へえ？」

看護婦は奏太に興味をもったようだった。

「そんなに熱心にお見舞い？ 君、今まで来たことなかったよね？」

あの子に一目ぼれでもした？」

「いや、そういうわけでは」

「ふうん」

看護婦はなぜかにこにこと笑って、まあ、と言った。

「あの子のお見舞いなんて、親戚の人とお隣さんぐらだから、ほとんど来てあげて。あの子、病室脱走癖があるのよ。客が来るとそ



うでもないから、協力してちょうだい」

「……脱走阻止をですか？」

「そ」

「……善処します」

「どーも」

看護婦はそのままスタスタ歩き去った。奏太は、じゃあ季彩子に声をかけられた時、もしかして脱走中だったのかな、と思いながら廊下を通り抜け、階段を降りていった。

## ？彼女を友人に紹介する季節

知樹の所に先に行こうと思っていたのに、病院の前でふと顔をあげたら、奏太は三階の窓に季彩子の姿を発見してしまった。しかたがないので順番を変更することにした。

「彼女を優先したね。合格」

「何に合格したんだ、俺は」

笑顔で出迎えてくれた季彩子に奏太はそう返した。言いながら、さりげなく病室を観察する。一人部屋だ。点滴等はないし、心電図を映す機械などもなかった。病人の部屋、という感じはしなかった。不治の病説が奏太の脳裏をかすめたが、判断は保留だ。

季彩子は答えず、奏太を上から下までジロリと眺める。

「お土産は？」

「は」

「お見舞いの品」

「何、それ毎日要求する気？」

「当たり前でしょ。手ぶらで彼女のお見舞いにくるの？」

「……知樹にすら最初の一回以外は持って行ってないぞ」

季彩子はそこで、ん、と言った。

「知樹って？」

「ここに入院中の友達」

「ああ、それで奏太くんは病院にいたのね」

なあるほど、と呟いて季彩子はやっと笑った。

「紹介して！」

「は」

「その子の所にも行くんでしょ。私も連れてって」

切り替えの早い子だな、と思いながら奏太は言った。

「勝手に病室を出て良いの？」

すると、季彩子はみるみるうちに不機嫌な顔になった。

「奏太くんはもつと不真面目だと思ってた」

「不真面目を美德みたいに言うけどそれ失礼だからな」

奏太はぼりぼりと頭をかいた。季彩子の名を呼ぼうとして、はたと気付いた。

「……そういえば、なんて呼べば良いんだ」

「ん？」

「君のこと」

「別に好きなように呼べば良いんじゃない？」

「特に好きな呼び方なんてないし。そっちの希望を聞く」

「えー」

季彩子は唇をとがらせた。

「何その無関心っぷり。彼女の呼び方くらい自分で決めてよ」

「……じゃあ、君と一番近い人は、君をなんて呼んでる？」

季彩子は一瞬目を瞬いた。

「家族には、キサって呼ばれてるけど」

「じゃあそれで」

季彩子は意外だったように一瞬黙ったが、少し唇をとがらせて、

まあいいけど、と言った。

「呼び方がどうかしたの？」

「いや、呼びかけようと思っただらとっさにどう呼べば良いのか分からなくなっただけ。……季彩は、脱走の常習犯なんだって？」

季彩子はものすごい勢いで奏太の襟首を掴んだ。

「誰に聞いたの」

「……か、看護師さん」

「のりりんだ」

勝手に納得して、季彩子は手を放した。

「かーっ、のりりんのバカ、勝手に話すんじゃないわよ。……ていうか、なんで面識あるの？」

「や、病室の場所確認しに来た時に」

「来たの？ いつ？」

「初めて会った日」

「何で入って来ないのよ」

「当日から来いとは言われてなかったぜ」

季彩子は言葉につまり、ぷっくりと頬を膨らませた。

「失格！」

「……何を失格になったんだ俺は」

とりあえず季彩子がうるさいので、奏太はのりりんとやら、ごめん、と内心謝りつつ季彩子の脱走に手を貸し、知樹の病室に連れていった。こちらは個人部屋ではない。

女の子を連れた奏太の姿を見て知樹は一瞬面食らった顔をしたが、すぐに察したようだった。

「おす」

「……よお日暮。彼女自慢か」

「別に。季彩が来たといって言うから……いてっ」

腕を小突かれて奏太は黙った。季彩子は進み出ると、にっこり笑って軽く会釈する。

「初めまして。永野季彩子です。奏太君の彼女です」

「ああ、はい……浅野知樹です。日暮のクラスメートです。……お噂はかねがね」

「奏太くん、何しゃべったの？」

季彩子はくりと振り向いて奏太を上目遣いで睨みつけた。

「付き合うことになった顛末を」

「なれそめは簡単に口外しちゃダメなの！」

奏太はでこぴんされた。結構痛い。額をなでていると、季彩子の関心は知樹に戻ったようだった。

「奏太くんとはもう知り合って長いんですか？」

「ええまあ……中学が一緒だったんで」

「じゃあ、奏太君のことよく知ってるんですね」

「うーん……まあ」

うむ、と満足そうに頷いた季彩子は、どこからともなく紙切れを取り出した。

「メールアドレスと携帯電話の番号を教えてください」

「え」

「は」

奏太と知樹は同時に言った。会って五分も経たないうちにそれはないだろう。季彩子は奏太を振り返ると、にっと笑った。

「浮気防止」

「浮気防止に彼氏の友達利用するのか。ていうかそんな動機だけで知り合いになろうとか携帯番号教えてとか、失礼だぞ」

「何よ、それだけが目的って訳じゃないわよ。奏太くんの親友でしょ？ お近づきになってみたいわ」

奏太は知樹を振り返った。

「俺達って親友だったのか」

「知らねえよ。ってかお前も失礼だ。そこは肯定しとけよ」

「じゃあ多分親友だ、季彩」

季彩子は楽しそうに笑って、言った。

「奏太くんもよ？ メールアドレスと携帯電話の番号。プラスアルファで住所もね」

「……季彩」

「ん？」

「メールアドレスと携帯まではよしとしよう。だけど、住所って何だ。個人情報保護法って知ってるか」

「適応されるのは第三者の場合じゃないの？ 私は第三者？」

睨まれたが、奏太はひるまなかった。

「俺たちはついこの前知り合ったばかりだ」

「でもカレカノよ」

「それだけで全てに特権がつくわけじゃないぞ」

「つくでしょ」

「つかない」

「お前ら、どこの小学生だ」

知樹が割って入った。

「いいんじゃないの、日暮。付き合うことになった経緯はともかく、彼女だつてのは本当なんだろ。彼女の住所も教えてもらえばいいじゃないか」

「そうね」

季彩子も同意する。

「フェアなのは嫌いじゃないわ。奏太くん、知りたい？」

奏太は少し躊躇した。興味あるかという意味で知りたいのかと聞かれたなら、興味はそんなにない。住所を知ったってどうしようもない。けれど、季彩子は奏太の住所を知りたがっていて、奏太は教えるべきであるようだったし、それなら季彩子のも教えてもらっておいたほうが安全なのだろう。

「じゃあ、教えて」

「じゃあ、って何よ、その無気力な返事」

怒られた。

「……教えてください」

「よろしい」

季彩子は満足そうに笑うと、またどこからともなく紙切れを取り出して、自分の住所と電話番号を書いた。

紙切れ交換。どこのクリスマスプレゼント交換会なんだろうこれは、と内心ツツコミながら季彩子の紙を受け取った奏太は、はたと気づいて言った。

「季彩」

「なに、奏太くん」

「お前、この番号、家電だろ」

「そうだけど」

「何かあった時に家に電話をかけるのはさすがに俺も気が引けるぜ。それと、メルアドは？」

「だって、私、携帯持ってないもの」

沈黙。

「ないのか……」

「ないわよ」

「季彩、聞いてなかった気がするんだけど、お前学年は？」

「女の子に歳を聞いてちゃいけないっていうのは常識でしょ」

「それこそ彼氏には知る権利のある個人情報だろうが。ちなみに俺は高校二年だ」

先に言われた季彩子は、少し渋々といった様子で白状した。

「私は一年」

年下だった。

「それくらいの歳なら普通持ってないか？」

「しょうがないでしょう、使う機会なんてほとんどないもの」

季彩子は口を尖らせたが、突然いいことを思いついたとでもいうように表情を輝かせた。

「そうだわ、彼氏が出来たんだから使う機会も出来るのよね。いい機会だわ、買うわ」

「即決だな、おい」

「そういうわけだから、買いに行くのに付き合ってね」

「……了解しました」

奏太は学習した。季彩子の言うことはたぶん聞いたほうがいい。

抵抗してもきつと連れて行かれるんだろう。まあ、いいや、と奏太は思った。別に行きたくないわけでもない。行きたいわけでもないが。

「じゃ、いきましょ」

「え」

しかし、腕を掴まれてさすがに戸惑った。

「今から？」

「今からよ」

「……季彩は行動的なんだな」

「ありがとう」

「につきりと、それは可愛らしい笑顔で言ってくれた。褒めたつもりではなかったのだけれども。」

「病室はともかく病院まで抜け出すのか。怒られたって知らないぞ」

「知樹の呆れたような忠告が、腕を引かれて前のめりに歩く奏太の背中にかかった。」

季彩子はその足で病院の最寄の携帯ショップへ行き、奏太と同じ携帯会社を選んで、奏太に機種についている質問し、最新機種を選んだ。ちなみに季彩子は奏太の携帯を使って家に連絡をし、親をいきなり呼び出して契約してもらっていた。季彩子の傍にいる奏太のことについて、親は特に何も質問しなかった。

「帰り道、真新しい携帯をいじくりながら、季彩子はうなっていた。奏太くん、これ色んな機能があつてよく分からないわ」

「最新のなんか選ぶからだろう。ほとんどの機能は一生使わないで終わるぜ。……さつきも言ったと思うけどさ」

季彩子は膨れ面をみると、奏太に向かって買い物袋を突き出した。「読んできて」

「……は」

「説明書を読んできて、私に説明して」

「……自分で読んだら？ どうせ暇なんだろう」

「なにそれ。それが彼氏の態度？ かよわい病人に知恵熱を出させようつての？ 私が倒れたら奏太君に慰謝料を請求するわよ」

「……確かに受け取りました」

「面倒くさいのでさっさと折れることにした。」

そしてその夜、季彩子からメールが届いた。いじくっているうちに絵文字機能を発見したらしく、意味のない絵文字の羅列が並んでいる。文章だけ何とか抜き出して、奏太はその文を解読した。



楽しかったありがとまた明日。来なさい

予測機能が妙な感じに働いている。そして小文字の「っ」の打ち方が分からなかったらしい。

溜息をついた奏太は、ふと気付いて、ぼそり、と独り言を言った。

「……病院で携帯使っなよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7451i/>

---

セゾン・コロレー

2010年10月19日14時56分発行